

高速道路を使つて、よく両親と一緒に来ていたショッピングモールは、ゴミ溜めと見紛うほど変わり果てていた。

もとは確か、眼鏡売り場だったコーナーの一角。

眼鏡を展示してあつたはずの四角い棚が点在している。面影があるのはそこだけだ。飛び散ったガラスを踏むことも憚らず、ゾンビが群がついている。

昔観たB級映画がそっくりそのまま、こんなだった。

唯一違うのは、主人公がそのままゾンビの群れに飲み込まれていくはずのシーンが、たつた今、ゾンビの群れが蹴散らされるシーンに変更されたところだ。

上映されるはずのシーンとは違う現実を、私は階段の踊り場から呆然と眺めていた。

群れていたゾンビの、最後の一人が倒れる。群れを始末した人間……おそらくは生存者……の姿が現れる。

強いな。どんな人だろう。

切る余裕がないから伸ばしっぱなしの、まとめた髪がかかった肩で息をするその人は、確かに強そうだった。背は高いし、肩幅も広くてガタイが良い。血が飛んで、もう元からそういうデザインにも見えるくすんだモッズコートが、彼をいかにもパンデミック映画の主人公然とさせている。

ただ、その人は主人公というより、主人公『だった』人だと

思った。

これもパンデミック映画でいえば、主人公は必ず生き延びるとは限らない。

最後は感染者に見られる症状が、主人公の身体にも表れているのを示唆して、エンドロールに入る映画もあるわけだ。ここで終わればいいものを、さすがはB級だから、エンドロール後に数秒、ゾンビになった主人公が荒廃した街を彷徨う姿をおまけ映像みたく付け足しちゃったりもする。

LEDが点滅する踊り場から遠巻きに見るその人は、まさにそのおまけ映像に映っている『元』主人公だった。

もう感染してるんじゃないかと思つた。ああ遅かったかな、とどこか他人事に……何が遅いのか分からないけど。

とにかくその男は、動き回る身体の俊敏さ、力強さとは裏腹に、まるで生気が感じられなかったのだ。

顔色は悪く、青白く見えるほど。表情は暗い。というより無い。髪が長いせいでかかる影が、そのまま顔面に貼り付いて黒いのつべらぼうだ。

ゾンビと化した感染者のほうがまだ、悲痛な笑みというおかしい表情をもっている。

私は、血のついた包丁を握るその人の、右手を見た。

二カ月前、この地獄絵図を描いたウイルスが日本に入ってきた。

「Laughable」と名付けられたそのウイルスは、つまるところ

ゾンビ化する感染症を引き起こす。

顔の筋肉が引き攣り、自分の意識とは無関係に笑みを浮かべるようになる初期症状。

幻覚を見るようになれば中期。

身体も意識も自由が利かなくなれば末期。ゾンビの出来上がりだ。

まだ電話が繋がっていた一カ月前。家族全員、仕事も学校もなく家に立てこもらざるを得なくなつて、いつも顔を合わせる時間がなかった父の顔を見慣れてきた頃。

父は誰かに電話をかけた。

リビングの固定電話に必死に訴えかける父の隣には、お母さんもいた。深夜のことだったから、私は自分の部屋で眠っていると思っていたのだと思う。実際、私はそのとき偶然トイレに起きてきただけだった。

もう自分達には中期症状が出ていて助からないだろうから、娘を頼む。そんな内容を受話器の向こうに話していた。切羽詰まった声を出すその口許はニヤニヤ笑っていた。お母さんも。

親戚付き合いの希薄な家、そうでなくてもこの非常事態に、他人に構っている余裕のある人などいないはずだ。その他人が親戚だろうが命の恩人だろうが、他人は他人だ。

いったい誰にかけているんだろう。誰に私を託そうというのだろう。

誰であつても嫌だった。

毎日毎日、洗面台の鏡を怯えながら睨みつけるのにも、もう疲れた。

どうせ終わりは見えている。近いうちに、鏡の中の私は勝手に笑うのだろう。ならせめて、笑う私の隣には笑う両親がいてほしい。

けれど私は、廊下の暗闇に立ち竦んだままだった。

それから何日もしないうちに、お母さんが先に駄目になった。

父は私のリュックに持たせられるだけの食糧と水を詰めて、感染者が少ないであろうルートに線を引いたシヨッピングモールまでの地図と、一枚の写真を渡して、私を家から追い出した。

写真の意味を聞いておけばよかったけれど、渡されたときにはもう聞く間もなかった。

私が中学校を卒業したときの家族写真かと思つたけれど、違った。

写真に写っているのは知らない男の子だった。十歳くらいだろうか。写真の裏には、マジックで『2004.8.22 亮吾くん』と書いてあった。遊園地のフードコートに座つて、カメラに向かってピースサインをつくるその右手には、火傷痕。

包丁を握る手に、斑模様がある。私は写真のピースサインに浮かんでいる火傷痕と見比べた。

……同じだ。

「おい！ アンタ、そこで何してる」

男は怒鳴り声と同時に、その獣のように鋭い眼光を私に向けた。

「あの、亮吾……さん、ですか？」

男はハッとして、掲げかけていた包丁を下ろした。敵意が薄らいだその顔にも、やっぱり見覚えはなかった。

鏡で自分の顔を確認しろ、両手を上げたままこっちに向かつて……いと命令されたので、その通りにした。

父は私のリュックに、小さな子ども用のコンパクトミラーを入れてくれていた。私が物心つくかどうかの頃、ここに遊びなんかでよく使っていたやつ。

どこに仕舞い込んでいたのか覚えていないけど、父は覚えてくれていたらしい。このコンパクトがなかったら、おしまいだったかもしれない。

「アンタ、よく俺が分かったな」

「写真を……父から……お父さんから受け取っていたので」

私は亮吾さんの後を歩きながらコンパクトを仕舞い、代わりに写真をまた取り出して彼に見せた。

まだ完全に警戒が解けたわけではないのか、それとも私の所持品を見るためか、亮吾さんは物を取り出す私の動きをじつと観察していた。

「この写真です。裏に名前が書いてあつて」

黄ばんだ写真に、彼は目を細める。

「ああ、これ……あんときのか」

「はい、たぶん」

「よく覚えてるな、アンタまだ四歳かそこらだったろう」

「ぼんやりとですけど」

嘘だ。本当は、何も覚えていない。私にとってこの写真は、知らない遊園地が背景の、知らない男の子の写真だった。

この男の人が『亮吾くん』だと分かったのは、右手に火傷痕があつたから。でも、正直に言ったら気を悪くされるかと思つて、話を合わせた。

私は亮吾さんのように強くない。一人では一日たりとも生き延びられないだろう。だからこんな状況下において、守つてくれなんて虫の良い頼みをするのだ。

亮吾さんに気に入られること、少なくとも嫌われないこと。これが今の私が最優先に考えるべきことだ。彼に見放されて、追い出されてもしたら、もう凄惨な死まで秒読みなのだから。

亮吾さんは、止まっているエスカレーターの前を塞いでいた感染者を、包丁で突き刺してどかした。嫌いな料理の小皿を箸で遠ざけるのに似ていた。

階段代わりにエスカレーターを登り、三階の元・寝具売り場に真っ直ぐ歩いていく。

寝具売り場は全面にシャッターが下りていた。他にもところどころ、シャッターが下りているところはあるけれど、どこも内側からバンバンと叩く音が聞こえていた。

この寝具売り場からはそういう不穏な物音がしない。

「出入りするときは必ず締める。絶対忘れんな」

「はい……」

亮吾さんはそのシャッターを上げて、中に入るよう顎で促す。のろのろと入ると口で急かされた。そのまま、元・スタッフルームに通される。続いて入った亮吾さんが、背後でドアを閉める音が響く。

男の人と密室で二人きりになることに、何の不安もよぎらなかつたわけではない。亮吾さんは何の説明もなく、私に「親御さんとの約束通り守ってやる」とも「そこまでの面倒は見切れないが場所は貸してやる」とも言っていない。どういう意図でここに連れ込んだのか分からないのだ。

けれど、今は我が儘を言っている場合ではないことも分かっていた。私がどういう用途で使われようと、傍に置いてもらせるなら文句は言えない。

この部屋に来るまでの道のりで、既に亮吾さんは私を感染者から守ってくれている。ということは、少なくとも私が近くにいる限り、見殺しにはしないでくれるということだと思う。

何かしらに使われるよりも悪い、最悪の場合……持ち物や食糧を奪って私を殺すつもりでいる場合でも、それは最悪の死に方ではない気がする。

亮吾さんがよほどの異常者でない限り。

包丁で一刺しだ。

誰とも分からないゾンビに身体中を噛まれ、醜い笑みを浮かべて街を徘徊し、いずれは全身の肉が腐り落ちるよりは……まだ幾分か見られる死体になるだろう。

私は何を今更、この期に及んで冷静に、綺麗な死に方を選ぼうとしているんだろう。

お父さんもお母さんも、それができなかったのに。

そんな二人に文字通り決死の覚悟で生かしてもらって、もうあの二人と死ぬことはできなくなつたのに。

私は自分のことしか考えていない。

「おい」

「はい」

「アンタ今笑つたか？」

「あ、はい……すみません、紛らわし」

「真顔で俺の目を見ろ」

言う通りにした。……………。

「よし」

ずつと、既に中期まで症状が進んだ両親と過ごしていたから、自分が初期症状を疑われることに慣れていた。毎日、両親を前にして笑えるはずがなかつたし。

亮吾さんは肩の力を抜き、「その辺に座れ」と言うと、自分も表の売り場から引つ張ってきたらしいマットレスに腰かけた。

「なんで笑つたんだ？」

「……なんか……」

缶詰とペットボトルの抜け殻を足でどかして座り込む。何

年ぶりに座ったような感じがして、腰からふつと力が抜けた。なんか、馬鹿馬鹿しくなったのだ。私を生かした両親が、生き延びてしまった私が。

両親に申し訳ないと思うのに、可笑しくなってしまうた。文字通り必死に生かすほど、私は価値のある娘ではなかった『文字通り』……両親の死にこんな皮肉を思いつく程度にはまだ余裕があるんだか、もうこんなことを考えて笑うしか、他に何も残っていないんだか。

いずれにせよ、そのくせまだ生きようとする。生きていたって仕方ないのに。終わりは見えているのに。馬鹿馬鹿しく、馬鹿な娘だ。

答えないと怪しまれるが、どう説明すればいいのか分からない。答えたところで理解されず、症状と勘違いされて殺されるのではないかと思った。

「まあ、笑えてもくるよな」

「え」

考えあぐねていると、不意に亮吾さんがそう呟いた。私は顔を上げ、聞き返そうとしたつもりが「はい」と声を出していた。

「亮吾さんも」

「亮吾でいい」

どう見ても亮吾さんのほうが十歳は上だ。それに、私は親友であつても呼び捨てにしたことはない。

「……じゃあ亮吾くんは、でも亮吾くんは笑ってないね」

「アンタに疑われても困る」

「ああ……」

「それに、笑い疲れてきた。我ながら悪運の強さにはいい加減呆れた」

なんとなく、この人とは気が合うのかもしれないと思った。

「ああ、ははは。あ、今の、自分で笑ってます」

「分かってるよ。悪いがさらに笑えることがある」

碌なことではないだろう。たぶんB級映画と同じ、笑えないような悪いことだ。

私は笑みを湛えたまま、不安に心臓が浮かせて聞いた。

三ヶ月ぶりに見る夕焼けは、綺麗だけど気味が悪かった。

橙色というには赤すぎる。

切れた電線を引きずる電柱と、生前と変わらず田んぼを徘徊しているのだろう感染者の群れが、影絵のように黒く浮き上がっていた。

それももう沈む。

「次の信号を右。あの看板のとこ。それから……道なりで二十分くらい、かな」

「看板？ あれか。違った、あれゾンビじゃねえか」

「ははは！」

カーナビが点かないから、私達はモール内の書店から取ってきた観光雑誌の地図を頼りにしていた。

助手席で目を凝らす私は地図を読むのが苦手だけど、

幸い、亮吾くんがだいたいの道のりを覚えていた。

「思ったより早く着きそうだね」

「赤信号も一時停止もねえからな。楽でいい」

あのショッピングモール内に落ちていたという、車の鍵。亮吾くんはそれを使うことを考えていたわけじゃないけれど、なんとなく取っておいていた。

昨日、二人で屋上の駐車場を探し回って、一台のハスラーの目が光ったときは、子どもみたいに抱き合ってハイタッチをした。亮吾くんの身体に触ったのはそれが初めてだった。けれど火傷痕のざらついた感触がなんだか懐かしくて、少しも嫌な感じがしなかった。遠いとはいえ、親戚だからかな。

こうして走り出してほぼ丸一日。私と亮吾くん、地図、あと積んでいるのは五百ミリペットボトルの水一本だけ。亮吾くんのはもう空だ。

「水、ちようどいい量残ったね」

「悪いがすぐ喉が渴いた」

「飲みさしでいいでしょ」

「ああ全部くれ」

私はドリンクホルダーからペットボトルを取り、亮吾くんに手渡した。

「ガツリンもちようどいい？ 足りるかな」

「足りなかつたらそんときだ」

「うん。……いいの？」

「いいも何も、どうしようもない」

「そうじゃなくて、他に行けるところってどうか、行くべきところがあれば……そのために使うのもアリだったかなって」

亮吾くんはサイドミラーに映る私の顔を見て、少し考えた。

最初から最後まで表情が無の一種類しかない彼だけど、目線でだいたいのことは読み取れる。これは考えているけど、そんなに深刻には考えてなくて、どちらかというと私の考えを読み取ろうとしている顔だ。

私が亮吾くんに初めて会った日。あの日彼が言った、『笑えること』。

『ここには、食糧がもう一カ月分もない』

食糧の確保のために彷徨っていた亮吾くんがああショッピングモールに辿り着いたときには、既に大半の食糧や水、使えそうな物資が漁り尽くされた後だったらしい。

シャッターが下りている場所を開ければ何か見つかるかもしれないが、その保証はない。内側で物資を荒らしていた内側の感染者を解放するだけに終わる可能性のほうがずっと高いだろう。

『B級映画みたいだなあ』

ゾンビパンデミックの定石、案の定のエンディングだ。

亮吾くんは、『B級映画は嫌いだ』と言って、ポケットから車の鍵を出した。

車に刺さっている鍵には、汚れて茶色くなったマスコットキャラクターが首を吊っている。

他に行くべき場所といつても、ここまでのドライブで記憶よりもいつそう廃れた街中を見る限り、思いつかない。

ビルから田んぼまで荒れている。

あのとき見かけた映画では、ヘリで海を渡ればとか、新薬の研究所を探せばとか言っていたけれど、実際はこうだ。ヘリも研究所も、跡形すらないだろう。リアリティに欠けるあたり、さすがはB級。

「行くべき場所より、行きたい場所だろう」

「だね」

亮吾くんが律儀に駐車場の白線通りに停めようと苦戦するから、笑ってしまった。

「くそ、笑うな」

その場で停めて決まり悪そうに長い髪を掻くから、「切ってくればよかった？」とつい聞いたけれど、「いや、それこそ無意味だろ」と返された。

そういう私も、出発前にモール内の服を少し物色してみたけど、結局この制服のままでいいやと思ったのだ。亮吾もぼろくなった服のままだ。

「行くか」

「うん」

普通はとっておきの服で来るようなところだけど、もう誰

の目もないんだし、いいか。

亮吾くんは先に降りて、まだ幼い妹にするみたいに助手席のドアを開けてくれた。私が降りた後、閉めることはしなかった。

メルヘンな塀と門は案外実用的だったらしく、敷地内に感染者は少ない。

「おおー。真っ暗でも、なんかキラキラしてた場所って感じるね」

「腐っても遊園地だな」

感染者をなぎ倒しながら、真っ直ぐ進む亮吾くんの背中も、だいぶ見慣れた。

あのモール内で、いつだって目的地に迷わない亮吾くんだったけど、この遊園地でもそれは変わらない。

「ここが、あの写真の遊園地？ 私を亮吾くんが一度会ったときに、一緒に行ったっていう……」

「ああ。覚えてないか」

「ごめん。あんまり……」

半分だけ振り返って笑う亮吾くんの横顔は、髪に隠れてよく見えない。でも少し寂しげに見えて、やっぱり髪、切っておけばよかったのと思った。

「……じゃあアンタ、あの写真を見ただけでよく遊園地だと分かったな」

私は言われたことの意味が分からなかった。あの、幼い頃

の亮吾くんが写っている写真。あれは確かに、遊園地のフー
ドコートで撮られたものだった。

私達はコーヒーカップに向かい合って座る。カップに乗るときに、亮吾くんが手を貸してくれた。さっき車を降りるときも、亮吾くんらしくないな、と思った。

もしかしたら昔、四歳の私にもそうしてくれたのかもしれない。

カップの真ん中にある錆びた銀色のハンドルを回してみる。もう固まってしまっていて、軋むばかりで動かない。亮吾くんが力任せに回すと、その場でカップだけがぐるぐる回った。

もう電気が通っていないからか、四つのカップが載っている土台は動かない。

「このコーヒーカップについてるウサギ、見たことある、気がする」

この遊園地の、マスコットキャラクターだったのかな。

「そりやそうだ。毎日見てるから」

「え？」

「鏡、出してみな」

「確認？」

今更症状を見たって、仕方ないだろう。けれどそうじゃないらしく、亮吾くんは首を横に振った。

リュックから取り出したコンパクト。日に焼けて、色もプリントされた絵も薄くなっているけれど……微かに見える。蓋に、

カップのと同じウサギがプリントされていた。

「ここを買ったものだったの？」

「ひでえな、アンタが俺にせびったのに」

「そうだったんだ……」

私の顔を見て、亮吾くんはばつが悪そうに目を逸らした。

「や、別に思い出してくれつてんじやなくてさ。ちよつと、自己満足」

彼がこういう軽い声を出すのも珍しい。彼の声はいつも平坦で暗く、水を飲ませても掠れていた。

「じゃあ亮吾くん、最後にここに来て、よかった？　ここが一番来たかった場所？」

そう多く残されてはいないガソリンを使い果たして、ここまで来た。

二人で行き先を相談したとき、私には行きたい場所なんて何も思いつかなかったから、この遊園地に行き先に決めたのは実質、亮吾くんだった。

どこに決まろうと文句はなかった。今だって、やつぱりここがよかったと思う場所なんてない。どこでもよかった。でもせっかくだから、亮吾くんはここに来てよかったと思えていいな。

亮吾くんはハンドルを回す手を止めて、しばらく黙った。

考えている、というか、返答に困っている。答えが見つからないのかもしれない。

「アンタ、『B級映画みたい』って言っただろう」

「ああ……うん」

私がそう言ったら、亮吾くんは今まで話題にも出さなかった車の鍵を出した。

私のあの言葉が、彼をどういう方向にかは分からないけど、とにかく動かしただけは分かっていた。

「B級映画は嫌いだけど……嫌いだから、あんまり見たこともない。アンタの言うB級映画の最後って、どんななんだ？」

「んー……私も好きじゃないんだけど、お父さんがなんかよく、そういう古いゾンビ映画を借りて見てたのね。なぜかゾンビ映画ばかり」

映画の内容に、興味はなかった。

ただ、家であまり関わり合う機会がなかったお父さんが、深夜のリビングでじつとテレビに食いついている後ろ姿が珍しくて、私も水を飲みに来たりトイレに起きたりするついでに、その後ろ姿を呆然と見ていた。

真つ暗な中、テレビの光がぼんやりとお父さんを照らしていた。

眠っている私やお母さんに気を遣って小さくした音量。主人公達の叫び声は、英語だから何を言っているのか分からなかったけれど、ゾンビの呻き声だけは、言語も何もないから際立つて聞こえた。

今思えば、あの時間、そんなに嫌いじゃなかったな。

「ゾンビ映画も、B級なりにも色々な終わり方があるのね。よくあるのは、主人公がどうなったかハッキリしないやつ。物

資が無くなったりゾンビが溢れかえったりして、元いた拠点にいられなくなつて。海外に渡航したり、ゾンビ化をどうにかする薬を探すためにまた別の場所に向かったりするんだけど、その後主人公がどうなったかは描かれない」

「俺達はその一番知りたかったのにな」

「そうだね。でも、やっぱりその先を考えるのが難しいから、脚本にもできなかったんじゃないかな」

「今の人間の頭じゃ難しいか。現実でこうなってるのも頷けるけど、それが『よくある』終わりつてことは、その先を描いてるものもあるのか？」

「うん、たまにあつた。……」

「……………教えてくれよ」

「死ぬの、主人公が」

「ッ、だと思つた。感染で？」

「それもあるし、仲間内で裏切りに遭つたりもする」

「なるほどな。じゃあ結局全部、バッドエンドじゃねえか」

そうかもしれない。

どう転んでも、ゾンビや根本のウィルスをどうにかする手段がないから、主人公もいずれは感染してゾンビになるか、怪我や殺人に見舞われるかして終わりを迎えないければいけない。

食糧や水が完全に無くなるまでだから続けるわけにもいかないのだ。潮時で、強制的に幕を下ろす必要がある。

映画の中ではそうなのだ。現実では、幕を下ろすことすら

できなくても。

ああ、でも……。

「バッドエンド、とは言い切れないのもあったよ」

「へえ、生き残るのか」

「えっと、主人公は死ぬんだけど……」

「なんだ、やけに言い渋るな」

ちよつと、言うのが気恥ずかしかった。でも今更、私達にはあり得ないのだから、言ってもいいか。

「子どもが生まれるの」

「え、主人公の？」

「そう。主人公の男と一緒に生き延びてきたヒロインがいて、最後に、その二人の間に実は赤ちゃんができて……つていう」

「へえ……。それが一番マシな終わりか？」

「まあ、未来に可能性を託すつていう点では、バッドエンドではないのかな。私が見た中では、一番マシかも。でもハッピーエンドとも言い切れないよね」

亮吾くんは、特に気まづくは感じていないみたいだ。

もともと晴れ晴れとはしていない表情がより曇ったから、きつと、生まれた赤ん坊はどうするんだ、とか、こんな世界に産み落とされてもな、とか考えているんだと思う。

「亮吾くんは、考えなかったの？」

「あ？」

「そういう」と……」

今度の沈黙には、何の思考もなかった。

刹那、擦れた目が丸くなって、瞳孔が僅かに揺らいだ。

「ふつ、あはははは！」

「笑わないでよ。こっちはこれでも女なんだから、最初そういう警戒を全くないわけないでしょ」

「俺と？ お前が？ ははっ、ないない」

いつそ清々しく言つてのける。

この人は本当に、この一カ月で一度だつて私を変な目で見たことなどないのだろう。周囲に、生きている女性が私一人だけであつても、選択肢にすら上らなかったわけだ。

私だつて、このエンディングの話をしたくなかったのは本当に、一応異性同士だから気まづく思つただけだ。

出会つてから……正しくは再会してから、亮吾くんにはずつと守つてもらつた。

彼が何度感染者の手を引き剥がして、盾になつてくれたか。それだけじゃない。もし私一人であのモールに閉じこもつていたら、仮に生き延びられても一週間と経たずに精神がおかしくなつていただろう。

大して役に立ちもしない私を、親戚だからという理由だけで、こうして最後まで見捨てないでくれた。

だから亮吾くんには、感謝してもしきれないくらいだ。けど異性として好きにはならなかった。

DNAが近いからとか、そういう生物学上の作用を抜きにしても、たぶんタイプじゃないんだと思う。

私は清々しくも無神経な亮吾くんの言い草に、ムツとして目線を逸らすそぶりをしつつ、どこかで冷静に彼の容姿を改めて観察した。

こういうガタイが良い男性、私はあまり好きじゃない。ふとしたときに、亮吾くんの腕を見て、私ごときその気になれば片手でどうとでもできるんだろうな、と恐怖を感じることは多々あれど、そこときめいたことはない。

もっとアイドルみたいに線の細い人が好きだし、顔立ちもどちらかというと、繊細な塩顔とか、可愛いのが好みだ。

どこをとつても亮吾くんは正反対に位置する。

だから万に一つも、『考えなかったわけじゃない』なんて返答だつたら困るというか、怖いんだけど。

こつちの気も知らないで……。

「だって親戚だし、ガキの頃に会つてるんだ。そんなこと微塵も考えなかったね。はー、あはは」

亮吾くんが笑つてゐるの、覚えてゐる限りでは初めて見た。腹は立つけど、笑つた顔はそう悪くなかった。

その笑顔が、すうっ……と波が引くように、落ち着いたものに変わった。

「でも、そうだな……前にさ」

「うん？」

「悪運が強いつて言つたら」

「うん」

「なんですか、いつも俺だけが残る。身体だけは丈夫だからかな。それを逆手にとつてやろうとしても、一番の目標に届かなくて、情性で二番目に縋り付いてきた。おかげで世界中がこんなになつても生き残つたが、そのせいで一人になつた。……思い返しても悪運ばつただよ」

私と亮吾くんは、一カ月を共にしておきながら、お互いがあのモールに辿り着くまでどうしていたのかを、詳しく知らない。お互いに詮索しないというのが、ほとんど暗黙の了解だつた。

聞いても良いことなんて一つもないことは、分かりきつていたから。

「……でも、最後に莉里と、とつくに廃園してたここに來られたことだけは、幸運だつたかもな」

私の名前は、莉里だつた。呼ばれたの、いつぶりだろう。

遊園地の記憶を少しでも覚えてゐるふりをしたのが、今になつて後ろめたい。

何か思い出したくて、写真を出す。遊園地のフードコート……どうしてこの、なんの変哲もないフードコートが『遊園地の』だと分かつたのか。

今なら何か、思い出せるかもしれない。切り取られた時間の中で笑う亮吾くんをじつと見つめる。

『泣くなよ。また今度来よう。約束』

声変わり前の、男の子の声。それに似合わずざらついた、右手の人差し指の感触。

私は右手の人差し指を、写真の中とは随分変わってしまった笑みを浮かべる亮吾くんの前に突き出した。……………ああ、そうだ。この感触だ。

「なんで笑ってるんだ？」

「分からない。亮吾くんこそ」

遊園地いつぱいの灯りが、キラキラ輝いて綺麗だった。これならゾンビも悪くないな。

Laughable……笑える。馬鹿馬鹿しい。